

《書評》

Richard Shusterman. *Ars Erotica: Sex and Somaesthetics in the Classical Arts of Love*. Cambridge University Press, 2021.

裴芝允 (ベ・ジユン)

私たちはどのようにして愛の仕方を学ぶのだろうか。自分が属している社会・文化、親を含む大人たち、友人から、愛情を受け止め、模倣することで愛を表現する。愛の中でも特定の相手との肉体的な関係が主となるエロスの愛の仕方はどうだろうか。百年前も、千年前も、その仕方は同じで、ある意味それは普遍的かもしれない。しかしながら、私たちは、風の噂で聞き、肩越しにのぞき、小説・映画のワンシーンから拾い、欲望の歪みが投影されたアダルトメディアを真似し、生物の時間の解剖図からも学ぶ。どれも真正面から性愛に向き合う学びとはいいい難く、その現場に遭遇し身を置かれてやっと暗中模索する。リチャード・シュスターマンの *Ars Erotica* は、性愛の仕方に真正面に向き合い、それが私たちの生の一部であるという、忘れられがちだが紛れもない事実を呼び覚ます。各時代の性愛が物語っているように、性愛は私たちの美の具現であり、その向上のプロセスでもある。

本書は、性愛の美学・哲学的な意味を、各地の歴史における性に関する様々な思想と理論、実践と文学を探索することで問い直そうとしている。ここでの「美学・哲学」は、学問体系という高次の観点から性愛の芸術性や価値を分析、判別、解説するためのものではない。そうではなく、「生き方 (ways of life)」、「生きる技芸 (art of living)」としての美学・哲学である。シュスターマンは忘れられていた哲学の意義を現代に蘇らせようとする哲学の試みとして「身体感性論 (somaesthetics)」を先駆けてきている。本書もその延長線上のものである。

シュスターマンは、美学、哲学に通念的な意味を超える意義を見出しているように、性愛についてもミシェル・フーコーの「性愛の技芸 (ars erotica)」という用語のもと、その意味を見出している。ラテン語 *ars* は *art* を意味し、ギリシア語 *erotica* は *love* を意味する。この不自然な合成語にみられるフーコーの意図をシュスターマンは次のように解釈する。まず、*love* を意味するラテン語の *amor* が、広義的で曖昧であることに対し、*eros* は、愛を意味する4つのギリシア語 (*agape*, *philia*, *storge*, *eros*) の一つとして肉体的な関係の愛をより鮮明に示す。逆に、*art* を意味するギリシア語の *techne* より、ラテン語の *ars* のほうが、創造性、技術、快

などを併せる、より広義的なアート概念を表しやすい。ars erotica は、性行為を含む肉体的な愛に内在するアートへの探求を示すタイトルである。さらにそのアートは、美術館に飾られるファイン・アートに止まらない、人々の生き方の実践で現れるものである。このように、フーコーからの借用である本書のタイトルに、シュスターマンは本書を貫く「性愛」の捉え方を反映している。

シュスターマンはこれまで、芸術、美学、哲学の地平を広げてきた。ギャラリー、大学、言説といった限定された次元から、実際にそれらが行われる場としての身体へと視野を拡張してきた。このような広義の芸術、美学、哲学の観点から、性愛は、美学の対象としてのアート、哲学の方法としての自己修養になり得る。このような大胆な主張には「性愛をあえて美化しているのではないか」、「現代社会においてセックスが暗に含意する、節制のない欲望、商業主義との絡み、人間の対象化などの様々な問題をそそのかすのではないか」といった懸念が付きまとうはずである。しかしながら、性愛をめぐる言説は、いつの時代も張り切った緊張を生み出し続けてきているが、そのポジティブな可能性が主流の共通認識を形成することは稀であった。このようなことを視野に入れながら、シュスターマンは、性愛はアートであり、自己修養であると、第1章から明確に主張する。性愛は、詩、音楽を始めとする、すでに芸術とされる多くの領域と深く絡み合い、豊かな象徴性を持つ。また、その経験においては形式、ミジャンセンなど美的側面が重視される。さらに、そこに至るまでのドラマとベッドシーン、その後の物語が私たちの生の中で丸ごと繰り広げられるのである。自己修養としての性愛は、微妙な雰囲気、微細な動きの感受・表現といった感性の訓練としての意義を持つ。また、倫理的な判断とも深く結びつき、社会的、文化的な知識の体得が性愛には不可欠である。次いでシュスターマンは、各時代と場所の性愛の物語を聞かせてくれる。

第2章は、ギリシア・ローマという広範囲の時代の性愛の技芸について扱っている。神話の神々が示しているように、美、快楽、感覚、同性愛、結婚制度など、性愛に関する様々な事象が、プラトン哲学とエピクロス派の身体観の対立に代表されるような、多様な観点からの活発に論争された。特に、ギリシアの性愛は美と深く結びつく。その独特な同性愛の文化、つまり、成人男性(erastai)と少年(eromenoi)の愛人の関係が、愛、性愛、美、倫理の複合的な関係を象徴しているかのようである。第3章では、聖書に基づくユダヤ教・キリスト教の一神教の保守的な性愛の伝統について論じている。一神教の神における性は、その存在がはっきりしない。また、聖書の中で「知る」という言葉は「性行為をする」という意味でも使われ、性行為は、唯一神が万物を命名して「知る」支配権として象徴される男性の支配的な地位が内包され、生殖という目的以上のことを意味しない。包茎の切除の伝統が端的に示しているように性愛に

伴う快楽は徹底的に否定され、貞節が徹底的に要求された。そこには性愛の美学はほとんど存在せず、婚姻関係の中の子孫を目的とする性行為よりも、独身主義や禁欲が高い価値を持つとされた。

第4章の中国における性の言説と実践は、その深い歴史ほど豊富な広がりをもせ性愛の技芸に多角的な示唆を与えている。史料や古典に記されている性は、陰陽の調和からなる「道」といった存在論的な次元、養成術として性行為の具体的な指針を記す房中術、一夫多妻の家庭を円満に維持するための家政にまで至る。シュスターマンは、養成を超える自己修養としての性愛の可能性に注目する。性愛を通して目指される調和、前戯、性交、振り返りを通して行われる仕草のタイミングと意識的・儀式的な振る舞い、全ての過程を十分に享受するための慎みを、自己修養として捉えているのである。第5章では、インドの性愛の言説について述べており、目を引くところは、その芸術性 (aesthetics) である。カーマスートラには、性愛に直接関わる仕草だけでなく、詩、歌、舞、花飾り、服装、インテリアデザイン、冗談、学識のある言葉遣いなど、関連するアートの領域が求められている。節操のある性愛の享受は、高揚された精神的・宗教的な生き方の涵養につながるとまでされていた。

第6章ではイスラム文化圏の多香・多彩な、男性中心主義が際立つ性愛の技芸が記されている。他の文化圏とは相対的に、性欲そのものの自然な力とポジティブな側面がより評価され、五感を満たす性愛の具体的な技術を含む様々な議論と言説が文献として多数残っており、性愛の形態も、結婚制度の内外を問わず多様に存在していた。イスラムという言葉が示す「神に服従する」ことは、男性が優位となり、女性を充足させるといった支配的な性愛の関係にも現れる。第7章の日本の性愛については、神話の領域以外にも大きく三つの領域を探索している。日本は、中国の性愛の思想や文化の影響を受けながらも独自の性愛の技芸を形成した。平安時代の女性作家による「雅」と特徴づけられる、優雅で洗練されたナラティブの詩、書、音楽、また、仏教や侍文化において多目的な役割を果たしていた稚児や男色、さらに、江戸時代の高級娼婦と相手との性的関係に見られる緊張性とアートのパフォーマンスが取り上げられている。第8章は、ヨーロッパの中世とルネサンスにおける性愛の様々な論点が挙げられているが、それらは「騎士度的愛」として特徴づけられる。これは、キリスト教の性の文化の厳格さやイスラムの影響による亀裂とも見ることができ、表面上の騎士度的な愛の下、禁欲の徹底から欲望の認めまで、また結婚制度に対する議論、存在論的な愛の価値、美德などについての異論と議論が、様々な文献を通してなされている。

本書は、性愛に関する理論・実践的な考察において、以下のようなクリティカルな観点を提供する。まず、性愛の目的と機能についてである。性愛の目的が、性愛の機能としてひと括り

されたまま扱われることがほとんどであり、場合によっては、機能のために性愛が存在するまで考えられる。つまり、生殖、快楽、関係や権威の促進・保全・調節の機能を性愛は有し、これらの機能のために、性愛が行われると考えられるのである。このように機能や手段としての役割は、そのもの自身が有する意義を覆い隠し、濁らせる。Ars Eroticaは、「機能」の強調により忘れられがちである、性愛そのものの「目的」に私たちの注目を向けさせる。そうすることで、性愛が、ヨハン・ホイジンガのいう「遊戯」として捉えられる。つまり、性愛の目的はそれ自体に内在し、規則とバリエーションを絶え間なく創造していくのである。

もう一つ、指摘したいクリティカルな観点は、性愛の技芸において、いかに弱者が抑圧され続けてきたかについてである。ある時代のギリシア、中国、日本などでは、青少年期の選ばれた男子が啓蒙されるべき対象として成人男性に結ばれ美徳、哲学、知恵を教わっていたが、そこに肉体的な関係が密かに成立していたことは否めない。さらに、ほとんど全ての時代・地域で、女性は性的な関係の中で劣位にあり、管理されるべき対象とされていたことがわかる。古代ギリシアの中でもアテナの男女の上下関係は厳しく、家庭内の女性は室内に閉じ込められる反面、男性が結婚の制度外でも安心して性愛を含む豊かな文化を享受する場所として「シンポジウム」が設けられていた。それに対して、スパルタは女性の独立性が目立つように見えるが、そこにも「丈夫な子孫を作るために」といった管理の原理が働いていたのである。現代の世間においても内々的に伝わる性に関する噂のような言説（例えば、女性の性欲の程度の云々など）の多くは、実はその端緒は数千年前の男性支配的な古代社会にあるのかもしれない。シュスターマンも指摘しているように、それを掘り起こすこと自体が思わぬ誤解を招く可能性もあるが、私たちが、歴史を通して人々が勝ち取ってきた現代の意味での人間の尊厳や人権をもう一度意識しなおすためには重要な観点として働く。

性愛とかけて哲学と解く、その心をシュスターマンは次のように述べる。両者とも、自分自身を含む参加者の最大の満足のために、また、より上手く取り組むためには、時間をかけ、スキルを磨き上げる必要があり、今、自分が行っていることに対して注意深く、批判的に、想像力を働かせて、専念する必要がある（43頁）。これは、単に、性愛に限ったことではなく、私たちの生との向き合い、日常の営みや風景の全般へ拡張され得るのである。一方で、シュスターマンは、なぜ「性愛」を題材に選んだのであろうか。そこには、まず、身体哲学者としての一種の使命感が原点にあると考えられる。また、消費され、対象化される性のイメージの氾濫や、溢れかえる表象的な性愛によって置き去りにされる性愛の復権、つまり、生きられる美と切り離すことのできない性愛の復権への試みであるだろう。